

ルッキズム

佐藤 紀子 カナダ

(ルッキズム)が和製英語でないことに八十歳を過ぎて気が付く
大修館の英和にありてオクスフォードの英英になき(LOOKISM)なり
高齢者同士となりて夫と我 喧嘩のやうな大声も出す
難聴が進みていつも不機嫌な夫を笑はず葉はないか
ホームランを打ちたるやうな心地せり 夫を爆笑させたる今朝は

翁草

佐々木 勢津子 福島

湧き水に冷えしラムネを二本買ふそれだけで足る今日の日記は
簡単なメール打てたらそれでいいスマホ見てるより空見てゐたい
朝露にぬるる秋海棠いちりんをコップに挿せり 今日友がくる
わが庭にぜつめつきぐしゆ翁草生えてをりけり夫のゐた日々
溜めたがり屋の夫が残しし物あふれ小屋開けるたびため息こぼる

雲の羽根ペン

伊沢 玲 千葉

片脚を奪はれしひと瓦礫から義足をつくりガザの地に立つ
紙面から戦争の記事消ゆる日をおもひて仰ぐ雲の羽根ペン
国連の職員、戦場カメラマン…同級生は今いかに生く
冒険をしないわたしを見つめをりゼリーに透けるアップルマンゴー
梨を剥くナイフを伝ひしたたれる汁の冷たし赦しのごとく

家じまい

小倉

敬* 神奈川

両親の家をとうとう壊すんだ聞かれもせぬのにまた口にして
もうこれで最後と座敷に雛人形を飾れば手のひらあわせたくなる
大層な桐箱入りの掛け軸は百円で今日買いい取られたり
引き取りはかありませんと返された亡き母の帯、さて如何にせん
最後まで座敷に置かれた仏壇のかたちに畳のみどりが残る

木漏れ日

能勢 玉枝 東京

隣家より柵のあはひを抜け来たる水引の紅 これはようこそ
長月の桐の木陰の長椅子にゆるる木漏れ日銀の呼吸す
書き留めしコスモス人の歌あまた読み返しをりその体温を
口重き夫のそばでおほよそはわたしひとりのボケとツツコミ
青年の白きイヤホン現し世をへだてて熱くささやき止まず

子ども

真島 陽子* 新潟

欠席がつづくわが子の覚醒の気配をひろう母われの耳
仁和寺へストリートビューで旅をして中二の秋が深まってゆく
期待とはわが身の裡の大き蜻にゆゆんきゆるりにゆゆんきゆるる
紋黄蝶くるくる飛んで晩秋のひかりのなかにわらい声する
戦争に行くのは子ども どの人もだれかの胸に抱かれた子ども

松茸がくる

山田宗夫 長野

落ち栗を拾ひつつゆく山越えの道曲がるたび秋が深まる
蚊を食べる鬼やんま型のプラモデル帽子に差してゆく藪畑へ
汗かきの妻が畑にでるときの扇風機付き赤い作業着
里にきて漁りてつひに撃たれたる熊に虫歯の数ありしとふ
夏野菜あげしひとよりああ秋のなつかしき味松茸がくる

空はもう秋

吉田美奈子 愛知

銀木犀みあげて立てば降りきたる香りのシャワーわが身を淨む
ひた土にどんぐり落つる固き音季節のギアを二段ほど上ぐ
細き莖真つ直ぐに立つ一叢の白まんじゆしやげ生絹のひかり
園児らの器楽合奏の音跳ねて三軒となりのわが窓たたく
影のなか歩くわが影思ひつつ背すぢ伸ばせり空はもう秋

常にあたらし

小野はつね 兵庫

傾けしグラスを満たす麦色の光に夏の街は暮れゆく
エキストラの通行人めく青年がふとんを抱へ坂道を来る
しやぼんだま、朝顔、冷や水売る声のゆきかふ江戸のすずしさおもふ
良夜なりざわりざわりと大椋の揺れて夜歩きに出さうなけはひ
空の雲、太陽、月、星太古より仰ぎ見るもの常にあたらし

プラトン言へり

中西正博 兵庫

庭隅の朽木に白くきくらげの連なり生れて雨の日つづく
彼岸花庭に咲く日を残りページ惜しみつつ読む『死ぬということ』
死は一回、生も一回。哲学は死の練習とプラトン言へり
エピクテトスの語録のいくつ九重の波わたり来しわれの帆柱
つひにわれ翁になれず青臭い歌を詠みつつこの世終らむ

眠らずともよし

島本敏子 奈良

やぶらんが薄紫の穂をかかぐ夫好みぬしこの花の色
カレンダー一枚下は秋の色きつねのこどもがどんぐり追ふよ
眠られぬ夜は眠らずともよしとやうやく思ふ傘寿を過ぎて
押し付けであつてもなくても誇りです戦争放棄をうたふ憲法
柿色の口紅買はむ齒科通ひ終はりし今日よろこびとして

パラグライダー

宮本君子 広島

朝夕に水をやりぬし季節過ぎ十月いよよ千日紅燃ゆ
つば広の白からあはきふぢいろのベレーに替へて秋の買物
喘ぎつつのほりし十種ヶ峰にて寝ころびみたり広い青空
赤や黄のパラグライダーただよへりふはり下界を見るは愉快か
下山する途中にひろがる芒原金に光れり銀に光れり